

札幌彫刻美術館友の会会報

いづみ

第5号

題字 國松明日香氏

本郷新彫刻シリーズ 5

「雪華の像」

東西相寄った2人の女性が一つの搭上に立ち、一本の月桂樹の葉を握っている。オリンピックの精神を表現。風で動く。
在京北海道俱楽部が道に寄贈、1971年
(昭和46年) 11月17日除幕



「石の彫刻国際シンポジウムに参加して」

渡辺行夫

6月1日から1ヶ月間、香川県の牟礼町・庵治町にて行われたシンポジウムに参加してきました。

とは言っても勤務の都合上、休暇は2週間が限界です。他の作家の半分の日程で作品を仕上げなければならないのですが、「なんとかなるさ」と、いつも樂観的状況把握で出かけました。

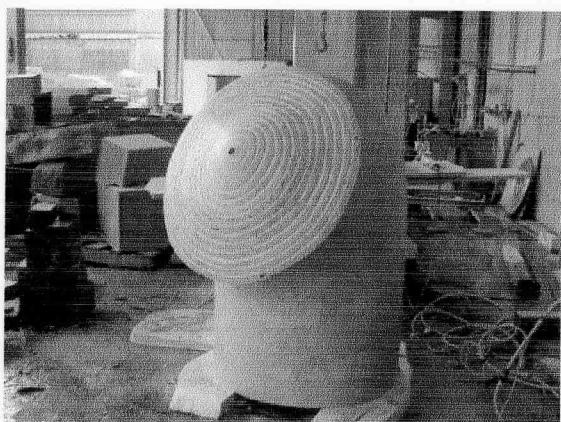
当地は庵治石の産地で伝統のある地場産業として石の加工場が集中しています。他の作家との交流もいろいろ刺激になりましたが、石にど



っぷり浸かった町と職人からも刺激を受けることができました。逆に私も彼らに刺激を与えた・・・?かも知れません。

と言うのは私の作品は発泡スチロールの芯にタイル状の石を貼り付けて制作したため、石彫の技術も技法もあり関係なく、それ用に自分で考えた方法で製作したからです。7~8年前から時々、息抜きのような感覚でやり始めた技法です。強度に対する工夫も加えてあり、今のところ耐久性も十分あります。中の発泡スチロールは全て取り除きますから、大きな団体でありながら空っぽの軽量作品になります。

他の作家は10トン前後の石と格闘している中でのこの作業は楽しい体験でした。韓国の作家もおまえは何をしているのかというような顔をして見ていました。題名は「石のフー」です。



「石のフー」*

息抜きの「ふー」ですね。

制作期間の1週間前に何とか完成でき、予定通りの日程で帰ってきました。誤解されないために一言付け加えておきますと、樂をしてその場しのぎをするためだけでこの技法をやっていはる訳ではなく、その辺のコンセプトを書くには字数が限られています。

話は変わって香川県といえば讃岐うどんです。私はもともとうどんが大好きですから昼は2週間毎日食べました。いろいろな店を食べ歩き、値段が安くてメニューも面白く、いくら食べても飽きませんでした。北海道はうどん屋さんが少ないので残念です。

(彫刻家)

(* この作品は香川県に永久保存されます:編集部)

第11回本郷新賞決定！

高橋淑子 会員

第11回本郷新賞が、千葉県松戸市在住の土屋公雄氏制作の作品『時の知層』に、以下の要領で審査され、決定されました。

選考委員（五十音順）

陰里 鐵郎	美術評論家
國松 明日香	彫刻家
桑原 住雄	美術評論家
酒井 忠康	神奈川県立近代美術館館長
澄川 喜一	彫刻家
向井 良吉	彫刻家
柳原 義達	彫刻家
山本 正道	彫刻家

選考経過

4月 6日	選考委員会開催（東京）
4月 15日	推薦委員（106名）委嘱
5月 9日	候補作品の推薦締切 (全国から25点の作品)
6月 15日	選考委員会開催（東京）
7月 10日	郵送によって正式発表
8月 29日	贈呈式・記念事業等開催

公共空間に設置された作品を対象とした本郷新賞の性格上、すぐに受賞作品を見に行けないのがとても残念ですが、8月30日から10月13日までの約1ヶ月半、本館で開催されている受賞記念土屋公雄展で作家の様々な面が伺えます。

受賞にあたって「場所性、環境を考慮に入れた創意工夫があり、製作意図が明快」と高く評価されている受賞作品『時の知層』は、大阪府和泉市の和泉シティプラザの入り口広場に設置された高さ約10メートルの強化ガラス製の四角柱です。文化複合施設のシティプラザ前の広場は知のオアシスと名づけられていますが、この場所にふさわしく、四角柱の中には地域の過去・未来の連続性をテーマに、和泉市内の土や幼稚園児の作った粘土造形などを内部で複雑に積み重ねてある作品です。

土屋公雄彫刻展開催と記念講演

土屋公雄彫刻展開催に当たって、8月29日14時より本郷新賞贈呈式ならびに土屋公雄氏による記念講演が行われましたので、その様子をお伝えいたします。

前庭で行われた贈呈式では札幌彫刻美術館理事長の挨拶に続いて、選考委員の一人で昨年度本郷新賞受賞者の彫刻家・澄川喜一氏から「6月15日に行われた選考委員会において、推薦された全国25の作品の中から満場一致で今回の作品に決まりました。土屋さんのこの作品は現代のタイムカプセルとも言える作品で、しかも土に埋めてしまうわけではなく目に見える形で歴史がつめられています。彫刻とは彫る・刻むと書くけれど土屋作品はものを彫ったりするのではなく時を刻んでいると思います。」と選考の経緯と感想が述べられました。

続いて、土屋公雄氏より受賞の謝辞がありましたが、その中で大阪からわざわざこの記念展のために来てくださったボランティアの日高ご夫妻の紹介がありました。

今回の受賞作品『時の知層』は制作に足掛け3年をかけ、アートワークボランティアと呼ばれる一般公募の市民や学生が構想から素材集めまで土屋氏と共に制作にたずさわっています。

土屋氏の記念講演までの待ち時間に、澄川先生とともに日高ご夫妻からもお話を伺うことができました。

お二人はこのボランティア募集の張り紙を見るまでは全く土屋先生のことを知らなかったそうですが、制作開始後は、2~3ヶ月ごとに先生と一緒に構想を練るなどを重ねました。

コンセプトが決まるごとに、今度は中に詰め込むものを集めるために和泉市の歴史的場所を訪ね歩き、弥生時代の土や全国の生産量の9割を誇るというガラス工芸の原料のチップなどを集めました。各地の幼稚園にはボランティアが出向き、園児を指導しながら5cm角の作品を作つて貰い、「持ち帰りました」とこの制作を振り返って受賞を心から喜んでおられました。

澄川先生も「住んでいる人も熱意も環境の一つだと言います。確かに本郷新の言葉に“彫刻は

地域を作り、地域が彫刻を作る”と言うのがあるはずです。本当にそう言う意味でも本郷新賞にふさわしいでしょう。」と談笑されました。

次に、土屋氏の記念講演が行われました。

作者の土屋公雄氏は福井県福井市に生まれ、日大を卒業後ロンドン チェルシー美術大学に学びました。その作品はヨーロッパ各地（フランス・イギリス・ベルギー・デンマークなど）をはじめ、カナダ・アメリカ・オーストラリアと世界各地に設置されています。日本国内では2001年に東京空襲犠牲者追悼のために設置された平和モニュメントが話題を呼びました（花壇の植え替えなどに年間約1億円の維持費がかかる）。生まれ故郷の福井市や山口県宇部市・埼玉県など作品は各地に広く収蔵され、北海道では道立旭川美術館が作品を収蔵しています。

この機会に作品めぐりの旅へと出かけたいところですが、まずは札幌彫刻美術館で作家の制作の一端と足跡を確かめてからをお勧めします。

講演は、スライドで作品の解説を交えながら、「アートは人を元気にするもの」「人間社会が必要としなくなったものを敢えて素材として使う」等、土屋作品の原点を伺わせる内容でした。「初個展が30歳という建築科出身で彫刻家としてはデビューの遅かった僕が本郷新賞を頂くということで本当に彫刻家の端くれになったと思います。」との素直な感想とボランティアを大切に思う土屋先生のお人柄に触れることができ、写真でしか見たことのない『時の知層』を身近に感じました。ただ、会場の関係で多くの方に聞いていただけないのが実に残念でした。



第11回本郷新賞贈呈式 土屋公雄氏の挨拶風景

財団法人札幌彫刻美術館 館長 三輪 望様

魅力的なオアシスとしてあるために

札幌彫刻美術館に対する提言

公的美術館は芸術文化の香りを効果的に市民に提供する責務を負っています。

友の会は創設以来事務局を彫刻美術館に置き、会則第2条に謳われている趣旨「当館の進展に寄与するため資金的・人的に協力するとともに、彫刻の鑑賞、研究を通じて会員の教養を高め、もって彫刻美術文化の向上に資する」に沿うべく様々な活動を展開してきました。

最近 友の会は様々な分野で豊かな経験を持つボランティア会員の参加を求め、急速に発達しつつある情報社会に適応して彫刻芸術情報の発信源となれるよう会報「いづみ」と「ホームページ」の編集・発行も行っています。そこで 今年度は職員と会員との対話を深めるとともに当館の将来構想、事業目的、事業内容や事務能力などを正確に把握し、積極的且つ多面的な支援活動を行うこととしました。

このため 当館の近代化と今後の発展のために館の諸資料の公開（情報公開）ならびに友の会の協力によって館の機能や事業内容が改善されると想定される事項についてボランティア支援を受け入れるよう提言いたします。

札幌彫刻美術館友の会 会長 橋本信夫

館の発展のために友の会が支援可能な事業

誰と、何を、何時、何处で、何故、如何にして改善し、発展の基礎を築くか！

当面 友の会が支援できると思われる以下の項目について館と具体的な協議を行いたい。

I 事務支援

1 従来通りのボランティア的手伝い

- a 郵便物・書類の仕分け、封入、宛名書き、発送

- b 印刷・出版物、カタログ、彫刻関連記事のリストの作成

2 資料整理と公開

- a 図書室機能の付設

- * カタログ、書籍、文献などの分類リストの作成

- * 書庫の整理と印刷物・カタログなどの陳列

- * 書籍・資料の公開と貸出し

- b パソコンによる資料の整理、保存と公開

- * パソコン技術の習得、活用とパソコンの保守点検

- * パソコンによる文書と写真の資料化、

保存、管理と公開

- * 統計資料の整理と解析

3 館事業のPR

- a 印刷物によるPR

- * 論文・評論などの作成と出版

- * パンフレット類の作成と配布方法の改善

- * 「もにゅまん」と「いづみ」の編集と活用

- b ホームページによるPR

- * HPの維持・管理方法の確立

- * 館と会のHPの一体化あるいはリンクによる相互乗り入れ

- * HPによる他美術館とのリンクと連携

- * HP用記事の作成、写真収集と編集

- * HP用資料・写真の分類・整理、入力

と更新

- * 画像処理による彫刻作品の展示法の確立
- * HP掲示板による（館と市民との）コミュニケーションの確立
- * HPによるアンケート調査と解析
- * PCとHP支援ボランティアの募集

II 教育・普及活動

- 1 彫刻解説員（解説ボランティア）による市民サービス
 - a 解説員養成コースの開設
 - * 解説員の資格と認定条件
 - * 養成方法、養成コースの開設、研修期間
 - * 解説の対象（生徒、一般市民、美術ファン）と解説の内容
- 2 パブリックアートの保全運動
 - a 野外彫刻の保全ボランティアの養成
 - * ボランティアの役割と必要性
 - * 養成方法の確立
 - * 他団体との連携
- 3 講演会や音楽会などの開催とPR
 - a 文化講演会の企画と開催
 - * 彫刻家、芸術家と市民を結ぶ文化運動への参加
 - * 「もにゅまん」と「いづみ」などによる彫刻家の紹介と支援
 - b 音楽会の企画と開催
 - ピアノなどの楽器の設置（寄付）
- 4 美術鑑賞ツアーの企画とPR

III 美術館に対する友の会の支援戦略

- 1 市内の美術館やギャラリーとの連携と情報交換
- 2 地元宮の森・山の手の住民との交流と親睦
- 3 ミュージアム運営に関する内外の資料の収集
- 4 美術館事業に関する市場調査とアンケート調査
- 5 文化行政や法律に関する資料整理
- 6 友の会組織の充実と会員募集
- 7 その他

貸館業務に至る思考

札幌彫刻美術館 館長 三輪 望

ここ数年来、ミュージアムに対する期待とともに「評価」が盛んになった。「評価」そのものが必要になってきた背景には、種々のことがあるが、次の三つが考えられている。

一つには、行政による対社会的な説明責任義務が求められるようになったこと。二つには、バブル崩壊後の限られた財源や人員などの資源を有効に活用するため、施策の有効性、効率性などをしっかりと把握し、適切な選択で実施する必要性が出てきたこと。三つ目は、地域住民のニーズを反映した執行を行うという自治責任が増して、情報を行政が正しく所有することが必要になっていること。

現代の社会生活では、どれもが大切なこととして実行されているが、最近とみに盛んになった。

23年目を迎えた札幌彫刻美術館は、多くの人々に支えられながら、ミュージアムとしての使命を果たしながらがんばってきた。この間、所有する本郷新の作品・原型を「どのように企画開催」するか知恵を絞ってきた。多くの人々を当美術館に来館してもらうための「特別展の企画」。更に「地域に密着した事業開催」を実施することによって感謝と協力を表しながら地域との連携を図ってきた。

しかしながら、諸々の条件から、冬期間の入場者減がネックになっていた。専門委員の意見を参考にしながら閉散期に貸館構想が出てきた。本年度から計画し実施して、入館者増と作品発表の場の協力をしようとの考え方から計画している。実施までには種々の解決する件があるが、観覧者数が「評価基準」の一つとされるならば、少しでも多くの入館者が訪問されることを私は望むからです。

私は、大切なこととして、「来館者へのより良いサービスの提供」と考えています。この言葉の意味は次の機会へと考えます。

北海道の野外彫刻の現状（2）

仲野三郎 会員（野外彫刻写真家）

北海道の野外彫刻の全貌を知ろうとカメラ片手に歩き出して10年、昨年（2002年）末までに記録したパブリック空間の作品数は1762点になりました。

今年になっての新設置は13点あり既設置作品の判明もあって記録件数は増加していますが、昨年末までの件数で見た作家別の状況は次のようになっています。

作家を男、女、外国人に分けますと、男性352、女性27、外国人30人でキャプション、サイン等で判明した件数は409人です。件数では男性が1,255、女性80、外国人50点で、この外に連名が21、会社名が49で、残念ながら307点が不明です。今後全道各地の学芸員の方にもご協力いただき、不明ゼロを期したいと思っています。

この状況を図-1、-2に示します。
個人別の設置件数は上位のみですが表-2のようになっています。

図-1

作家数

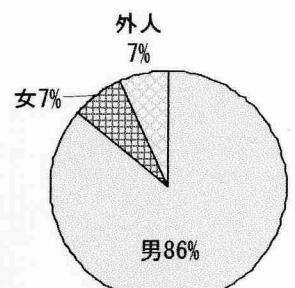


図-2

作品数

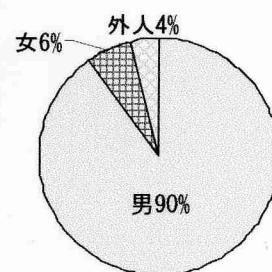


表-2 作家別作品設置状況

区分	順位	設置数	作家名	代表作品
男性	1	63	本郷 新	泉の像、札幌大通公園
	2	38	国松明日香	風の王、上ノ国町
	3	36	本田明二	海難慰靈碑、砂原町
	4	35	鈴木吾郎	市民憲章像、千歳市
	5	33	米坂ヒデノリ	開基百年、栗山町
女性	1	15	篠戸千津子	ブラウス、砂川市
	2	11	小野寺紀子	希望、岩見沢市
	3	9	藤原吉志子	人間と地球、札幌市
	4	6	熊谷紀子	海の音、虻田町
	5	5	宇田花織	風の子たち、湧別町
外国人	1	12	ギマラインシュ	バンザイマン、釧路市
	2	6	ベッシン	シロハヤブサ、置戸町
	3	5	ブルデル	4勇士、各道立美術館

これに続いて男性は佐藤忠良31、坂胆道28、山内杜夫27、女性は小寺真知子4、多田美波、神田比呂子、横田裕美、川上りえ各氏の3となっています。

石狩の砂丘に

浪岡豊明 会員

退職して会社を離れたとき、ようやく婆婆へ帰ってきたような気がした。仕事バカで世事にうとく、たった一つライフワークのように没頭していた短歌も40代の激務で中断し、20年以上の空白があった。作歌は再開したもののが性の弛緩に悩まされ、素材の表面を撫でたような作品ばかりが続いていた矢先、平成6年2月13日、「石狩」の像を訪ねる会に参加した。札幌駅北口で短歌会社友の濱久子さんと会い、心強かったことを良く記憶している。

世の中を知らない者にとっては、何もかも六十の手習いの気持ちで取組み、見聞を広めることが大切であった。

そんな折、石狩の風雪の中で見る像は切迫感があった。フォルムは顔も上半身も布に巻いて省略され、その表情は見えない。足は空間を指して何かを掴むようにも、訴えるように見える。悲痛な表情はこの足と指の動きの一瞬をとらえた描写からうかがい知るべきものである。このように彫刻は省略と強調の芸術であり、短歌は単純化と具体的の表現にあり、共に暗示が鋭い効果を生む。

「石狩」の像は開拓農民の辛苦を表現していると共に、一連の力作である無辜の民シリーズの構想による。砂丘に来て連想することは、本庄陸男の小説「石狩川」の移住農民のことや、小林多喜二の小説「防雪林」の小作農の姿であるが、これら小説の思想と「石狩」の像のモチーフは共通のものと感じられ、さながら三部構成のように思われる。

今回は本郷弦さんが同行され、無名塾のことなど味わいのある話を聞くことが出来た。祖父や父の血をひいて表現の領域を広げてゆかれる事であろう。

石狩には何度か来てこの像を見た。来る度に新しいことに気づき、思考や解釈や観点がうかんで、これでよいということはない。よい作品は何度見ても感ずるところ多いものである。

短 歌

「石狩」の像に

浪岡豊明 会員

平成15年

本郷の子の淳孫の弦と来て

「石狩」の像拝す冬また夏に
献花にたつ君は本郷三代の
表現の血ひく俳優として
布を巻く像の胴体膨らめり
孕む農婦をモデルとせしか

本郷新 無辜の民像

濱 久子 会員

平成6年

無辜の民の像に献花せむと来ぬ
本郷新の命日二月十三日を
像への道除雪しくるるにハマナスの
棘持つ枝が雪の間に見ゆ
はまなすの花咲く季に訪はむかな
石狩浜の無辜の民像に

平成9年

雪の上に転がるさまの無辜の民
あからさまなり雪少なきに
本郷新の弟子の一人が加はりぬ
厳寒の献花にスペインより来て
海風は吹雪ともなひ痛む耳
庇ひつつゆく像に向ひて
蝶色に半ば凍れる川の面を
バスより見つつ石狩へ向ふ

平成11年

冬の像に河邨文一郎も献花なす
二月なれど今年は温く
手稻連山も送信塔も光り見ゆ
無辜の民像の彼方に遠く
晴れ渡る石狩の空にピンネシリ
輝く見つつ献花終へたり
石狩の川面覆へる薄氷
ひび割れてわづかに動き始めぬ

～ 研修バスツアー見聞記 ～

安田 侃氏の彫刻の世界にふれて

石狩市 三上正一 会員

6月22日朝、大通りNHK前に安田 侃氏の作品にふれるために集まった研修バスツアー参加者37名（うち会員21名）は、一路アルティピアッツア美唄をめざして出発しました。

札幌では曇っていた空もアルティピアッツア美唄へ到着する頃には晴天に変わっていました。

私たちを歓迎するかのように、隣接する保育園では運動会が行われており、にぎやかでした。

最初に一同はアートスペース（閉校になった学校の体育館を利用）で職員の伊東奈美さんから安田侃氏の作品の説明を受け、続いて市民ギャラリーや様々な場所に設置されたモニュメントを見学しました。

白と黒、空と天、生と死などの相対するものや卵という作品で安田侃氏の世界を堪能しました。また、自然の中に置かれているモニュメントはその季節により違う顔を見せるといいます。2時間足らずの時間でしたが、参加者一同心地よく安田侃氏の世界にふれることができました。

安田侃氏の彫刻の世界で遊んだ後は、美唄市の長榮堂（後日、天皇ご来道の際にここのお菓子が献上された）でお菓子を購入し、昼食をかねて“北村温泉”へ。

北村温泉では、ゆったりと旅の疲れを癒す湯に浸かることが出来ました。



安田 侃氏の作品にふれて

安田 侃の世界 美唄を訪ねて

近藤健治 会員

6月15日の朝、斎藤会員から思いがけない「アルティピアッツア美唄」への日帰りツアーのお誘いがあった。私は予て安田侃氏のシンプルで深遠な作品をぜひ拝見したかったから二つ返事で22日を心待ちにした。

作家の故郷である美唄には札幌からバスで50分程。山に囲まれたギャラリーは衆小学校の廃校舎屋内外に設営され、青空に眩い大理石の「天沐」を初め、小高い丘の木枠の中に佇む「天翔」、モノクロのアートスペースに息づく「回生」や「無何有」、市民ギャラリーの「妙夢」など。大自然にマッチした作品群には悉く魅了させられた。又廃校前での幼稚園の運動会は少年の頃を彷彿させたし、帰りの温泉で汗を流し、橋本会長をはじめ会員の皆さんと談笑した一時は私の人生の充電に繋がった一日であった。

企画された幹事の方に感謝申し上げます。

(日陽会事務局長)



アルティピアッツア美唄 安田侃展会場にて

雪の彫刻

大橋尚夫

「アルティピアッツア美唄」には、森を背景にゆるやかな緑の斜面が広がり、安田侃の大理石の世界があった。

侃の生地は雪深い美唄である。夜通し降り続いた雪が稲積（にお）をすっぽりと覆い、晴れた朝、大きな雪の塊となって迫り、輝いている。雪に覆われた田んぼは雪原となって、風に吹かれて波打っている。そんな深い冬の景色が、私にも遠い記憶のなかで甦ってくる。

これら雪の造形が、やわらかな曲線と量感のある彫刻の原風景となってイメージされていることに納得できるのである。春先、雪の中から姿を現してもなんの違和感がない、自然に溶け込んだ空間を創り出していた。

それにしても「水の広場」の池に沈む小石のきれいなこと、手を伸ばせば届きそうで、思わず拾って帰りたい誘惑にかられた。



安田侃の野外彫刻とともに

美唄の野外彫刻

小澤美智 会員

美唄では幼稚園の運動会の音楽で迎えられ、そして緑濃い山に囲まれた広々とした芝生広場に白大理石を敷き詰めて作られた池と川が印象的でした。大小の真っ白な丸い石の上を浅い清流が流れ、そのまわりに幼児や小学生が楽しげに足を浸している風景は一幅の絵のようでした。

説明では、これらの石は彫刻家安田侃氏がイタリアで作成し、故郷の美唄の芸術文化交流施設に贈られたとのこと。その一端にふれ、私は始めて見る白大理石の美しさに魅せられて幸せな気持ちでした。

この様な素敵なかんじに恵まれた美唄の子どもたちは幸せで、将来芸術家が生まれることを期待しています。

野外広場にある彫刻は大きな作品が多く、また赤い屋根の旧栄小学校内の彫刻も拝見し、実り多い一日でした。

十日程経って天皇陛下の御行幸のテレビに安田氏が案内し、説明されている様子を拝見して更に感銘を深くしました。

「奥井 理ギャラリー」を訪ねて

原 典夫 会員

藻岩山の山麓、中央区旭ヶ丘5丁目に、今年5月に「奥井 理(みがく) ギャラリー」が開設された。藻岩山麓道の藻岩山登山口に入り、すぐ左に折れると大きな木立を背景にコンクリート打ちっぱなしの建物がある。

ドアを開けると白木を基調とした室内に、奥井 理の絵が並んでいる。全面ガラスで開かれた明るい窓辺で、本を読んだり、コーヒーを飲んだりもできるようだ。静かな清々とした何とも気持ちの良い空間だ。

奥井 理は札幌西高を卒業後、美大を目指して東京で必死に頑張っていた矢先、1996年7月、交通事故で19歳の生涯を閉じた。

彼の両親は残された絵を通じて、息子と対話をしたい、感動を与える絵描きになりたいという彼の思いを何とか人に伝えたい、そんな思いでこのギャラリーを作ったという。

ここには、奥井 理が小学生の時描いた油絵もあるが、主に高校時代と美大を目指した美術学園時代の油絵やデッサンなど40点余が展示されている。

初期の作品には身近なモチーフがおおらかに描かれているが、思春期のそれには若い世代が持つ苦悩や歓びがストレートに表現されていると同時に、真摯な制作態度が見てとれる。特に自画像が多く、日々いかに自分自身を真剣に見つめていたかが伺われる。また、亡くなる数ヶ月前のデッサンは一段と素晴らしいを増し、前途洋々を思わせて誠に惜しいとの念を深くする。

多感な年代に搖れる思いは、遺された日記や数多くのスケッチブックに、色濃く表されている。これらは「19歳の叫び」としてまとめられ、既に出版されて、その一端がここに展示もされている。

なお、ギャラリーは土、日、祭日に開館され、毎月一回ミニコンサートも計画されている。

北海道立体表現展 '03を終えて

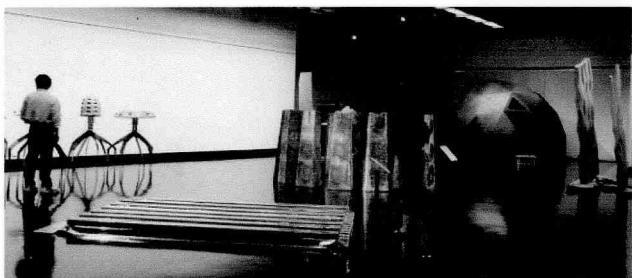
仲嶋貴将 彫刻家

平成15年9月6日から15日にかけて、北海道立近代美術館で『北海道立体表現展』が開催されました。2年前に続く2回目の展覧会です。バラエティに富んだ作品が並びました。

以下、私の書きうる範囲で記述したいと思います。各作品について書き連ねることなどは『書きうる範囲』外です。あくまで私の事後報告であることをご理解下さい。

先ずは何といっても出品するだけでなく事務局という立場に身を置くことで非常に多くのことを勉強させて貰いました。前回も展示部のお手伝いをして学ぶところ多々ありましたが、実際展示部に入ると、その責任の重さや仕事の多さに驚きました。人は誰でもそうですが、できることしか出来ません。例えば、全体会議の書類にミスがあったとします。ハッと気付き、誠に申し訳ございませんと言った所で、結局それが私でしかないのです。作品にも言えることですが、手掛けたものは全て鏡となって自分を照射します。己の小ささを痛感すると共に、そこに気付かせてくれる環境が、この立体表現展や事務局にあったと言えるでしょう。この文章を書くにあたり、“思ったように書いたら”と、ポンと押してくれる気遣いも企画、運営する側は常に持ち合わせていなければ、と今まで以上に考えさせられました。以前私も同じような立場になることが幾度かありました、まだまだ足りないなと、前向きな（苦笑）自己批判の連続でしたが正にそれも今の私です。

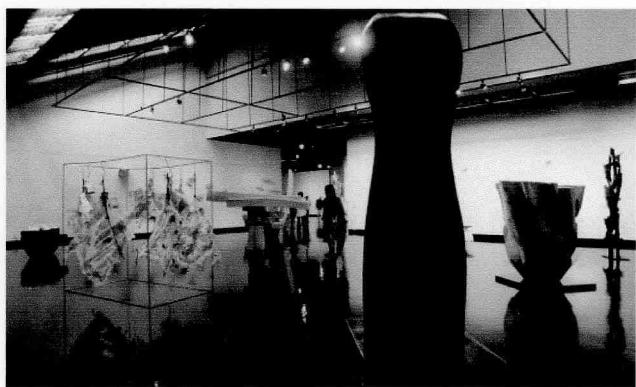
さて展覧会はスタートを切り、今年度は協議の結果蛍光灯を使用せず、スポットライトのみ



の展示室を設けたこともあり、事務局のみならず観賞する方々の意見も気になります。

作品の展示方法も、作家の意志に基づき試行錯誤しました。果たして、これが今回ベストな形だったか等、正解なき正解を求めている自分に気付きながら…。しかし、いくら言葉で語ろうと、作品や会場構成の善し悪しを判断、評価するのは常に鑑賞者です。

さらに言うならば、作品について多くを語り過ぎると、逆にイマジネーションの翼を奪ってしまうことにもなるのでは、と考えます。



会期中に台風14号が上陸しましたが、ワークショップ前夜に通過したため、天候を気にして表現展関係者全員が一喜一憂する場も何度か見られました。作家、事務局、アルバイトの方々の心が一つになる様には、感動を覚えるとともに、改めてこの展覧会に参加できたことの喜びも幾度となく感じました。結果的にメディアの力も手伝ってか、約2,000名もの鑑賞者を数えることになりました。搬出も皆一丸となり、なんと、石等の重たい作品まで作家同士がまるで『人力重機』となり、怪我や破損もなく無事終えることが出来ました。個展等ではお互い火花を散らすことがありますがここでは心一つ。それがよい意味での緊張感と協調性を生んだのはと考えます。こうして私達の短い“夏”は過ぎました。事務局はある意味、裏方です。それはどの組織にも言えますが、彫刻美術館の皆様も並々ならぬ努力と苦惱の連続では、と思います。一個人として、おこがましいですが応援ていきたい、と考えています。

秋の良き日に。

平成15年度後期 札幌彫刻美術館の展覧会案内

本館	記念館
<p>* 土屋公雄展 第11回本郷新賞受賞記念 8月30日～10月13日</p> <p>* 悲しみと苦悶の人々 後期収蔵品展（無辜の民シリーズ） 10月18日～3月21日</p>	<p>* 本郷新レリーフ展 15年度前期収蔵品展 3月29日～10月13日</p> <p>* 本郷新素描展 後期収蔵品展 10月18日～3月21日</p>

抜海は本郷新の釣り人の号です

仲野三郎 会員

1 もうひとりの本郷新さん

彫刻愛好家であれば誰でもおわかりと思うが、札幌にはもう一人の本郷新さんがいる。住所は南区芸術の森。いつも暖かく訪れる人を出迎える。

この像は吉田芳夫が演技者シリーズのひとつとして1980年に作ったもので1978年にとりかかった。本郷新が自分のアトリエで様々なポーズをとったと伝えられている。

像は98cmと小さいが、台座に乗って穏やかな目でこちらを見ている姿は小さいと言う感じは消え、一種の風格すら漂う。吉田芳夫の力量を示す苦心の作と言える。そしてその題名がいい。“抜梅の漢（おとこ）”である。抜海は地名であることは皆さんご存知と思うがそのあとの“漢”が素晴らしい。男であればただの男だが“漢”を“おとこ”としたその心は、7歳年下の吉田芳夫の本郷新に対する敬愛の念が込められていると感じられてならない。

2 抜海と号した気持ち

抜海は宗谷稚内市の利尻水道に面した天塩寄りの小さい港である。行ってみると漁業だけではないよう、石材なども陸揚げされていてなかなか活気があるが、本郷新が訪れた（昭和30年）頃はどうだったのだろう。

本郷新は「彫刻と釣りの世界」と題する竹田巖道との対談の中で次の様に言っている。

竹田：先生に釣りの号がありましたね。

本郷：ええ、抜海：です。稚内の近くにこうした地名があります。

アブラコの見事な大物を釣り上げた時、海から抜きあげるようにしたのでそれで抜海ですわ。

その時の獲物は60cmくらいあったかな。

3 抜海岩

抜海には抜海岩と言う稚内市の文化財に指定された岩がある。抜海岩はアイヌ語でバッカイ・ペ（子を背負うもの）と呼ばれ、美しくも悲しい言い伝えがある。



抜海岩

宗谷アイヌとの戦いで天塩アイヌの応援に来た礼文アイヌの若者が、天塩アイヌの美女と恋をして子どもにも恵まれ、幸せに暮らしていたが、若者は故郷礼文を忘れられず、ついに島に帰ってしまった。妻は毎日島を望む丘に登って夫の帰りを待ち続け、いつしか子どもを背負った岩になってしまった。

本郷新がこの民話を知っていて号を抜海にしたのか、それとも知らなかったのかわからないが、知っていたとする方が何か本郷新のロマンチックな一面をのぞくような気がする。

抜海の目

『札幌駅彫刻散歩』

あるお天気のよい休日の午後、札幌駅近辺で数多くの彫刻を目にした。

食事でもしようと訪れたホテル日航札幌のエレベーターホールには、『いづみ』の題字も書いていただいている國松明日香先生の『北北東の風Ⅱ』が置かれている。モダンな雰囲気にぴったりで道外の人も多く利用するであろうこの場にふさわしく、札幌人として嬉しくなる。

次に映画でも見ようとJRタワー7Fのシネマフロンティアに行くとそこには流政之氏の『映画神像 北海道』がまるでオスカーライドのように立っている。多くの若者は彫刻も柱も同じとばかりにその周りにたむろする。

再び地上に戻って安田侃氏の『妙夢』をくぐって駅前に踏み出そうとすると、多くの人々がその輪に腰をかけたり寄りかかっている。すっかり駅前の顔になったこの作品は触っているだけでみんなを安心させる力を持っているのかもしれない。通り抜けは諦めるとして、作家本人の言葉どおりに駅前通りを『妙夢』越しに覗くだけで我慢をするとしよう。

最後はやはり本郷新の『牧歌の像』で締めくろう。その名にふさわしくのどかな午後の陽射しを浴びてほのぼのとして見える。それもそのはず、5体の像の頭にはのんびり鳩までとまっている。なんて良い眺めだろう。周りにベンチも整えられたこの場所は小さな公園のようで大都会の駅前とは思えない憩いの場として誇らしい。

それにしても鳩たちの落し物や雨風にさらされる屋外彫刻の維持管理は大変だろうなあ。その割に汚れが少ないのは誰かが面倒を見ているからなのだろうか？

宮の森にも数々ある野外彫刻の維持に私たち友の会がお手伝いできることが何かあるのではないかと考えつつ、身近な彫刻を楽しんだ一日であった。

友の会だより

* 昨年 入館者・会員倍増を合言葉に、新生友の会が発足し、新しい活動を開始しましたが、お陰様で今年度は新会員が30名にも達し、会員総数は110名を越えました。

* 秋の行事として、彫刻家 佐々木けいし・川上りえご夫妻のアトリエ探訪、劉連仁生還記念碑の観賞と太美温泉での親睦バスツアー（10月25日 土）を企画しています。
詳しくは号外をご覧下さい！
大勢のご参加をお待ちしています。

彫刻美術館友の会ホームページ

<http://sapporo-chokoku.jp>

7月1日のお目見え以来、700人のファンが見て下さいました。会報「いづみ」を軸にホットニュースをお届けします。彫刻芸術の新しい情報源としてご利用下さい。

編集後記

札幌彫刻美術館を支援する素人集団ですが、「いづみ」の年4回発行もスムーズにこなして2年目に入り、感慨深いものがあります。

5号からは渡辺洋子さんが、進んで編集に携わって下さることになりました。ご主人のダム・ダン・ライさんはベトナムの彫刻家、洋子さんは画家です。紙面に変化が現われ、確実にプラス1です。（濱久子）

彫刻美術館友の会 会報「いづみ」No. 5

財團法人札幌彫刻美術館内 編集責任者 濱久子
〒064-0954 札幌市中央区宮の森4条12丁目

電話とファックス：011-642-5409

平成15年10月1日発行

編集委員の連絡先：電話とファックス

齊藤美年子：643-7246

濱 久子 : 893-5212